

光る赤いランプのように

先日、夜遅く聖堂に入ると、真っ暗だった
 聖堂で、静かに光っていた赤いランプに目
 を引かれました。病気などで、教会まで足
 を運ぶことができない方々のためにご
 聖体が安置されていることを記している
 その赤いランプを見つめて、何となく感動
 を覚えました。イエスは正に、「インマヌ
 エル」常に私たちと共におられる神であ
 ることを新たに強く感じたからです。
 ところが「常に共におられる神」と共にい
 るように、私たちは十分に心がけてい
 るでしょうか。—このことを再確認するた
 めに四旬節は相応しい時期ではないかと
 思います。



—今年の四旬節は2月18日、灰の水曜日
 をもって始まります。「四旬節」。四旬節
 とは、読んで字の如し、四つの「旬」(1
 0日)、すなわち四十日のことを表して
 います。皆さんもご存知のように「四十」
 という数字は、度々聖書の中に出ています。
 四十日四十夜続いたノアの時代の洪水—
 エジプトを脱出したヘブライ人の
 四十年間のシナイ半島での生活—神の山
 でのモーセの四十日四十夜—四十日
 四十夜、メシアとしての使命とは何か、そ
 の使命をどのように果たせばよいかとイ
 エスが考えておられた時に忍び込んだ
 誘惑—イエスの復活から昇天までの
 四十日。



「四十」という日数や年数は、時を正確に
 刻んでいるのではなく、神に出会い、神に
 耳を傾け、神を信じることは決して容易
 なことではなく、それに至るには時間がか
 かり、様々な誘惑や試練に打ち勝つ必要が
 あることを象徴的に教えています。

聖書の独特な言い回しを用いて言えば、四
 旬節の間に私たちは「砂漠」や「山」
 へ退くように誘われています。言いかえ
 れば慌ただしい日常生活の中で、神と共
 に、人のため、自分自身のために静かなひ
 と時を作り、黙想するようにと教会から
 呼びかけられているということです。



* 思い出せば、長く続く階段を利用して
 私は、何回もパリのエッフェル塔の上ま
 で登りました。途中で、ひと休みをし、息
 を整え、町の風景によく感動しました。



—信仰生活において、四旬節はなくては
 ならないキリスト者としての人生の「踊り
 場」です。四旬節は長い階段登りである
 キリスト者としての人生において息を整
 え、今まで登ってきた過去を見つめて、一
 休みする時です。四旬節は、過去を振り返
 り、今からの信仰生活をもっと充実した
 ものにするために準備を整える時です。

—今年の四旬節をこのよう
 な時にするように心がける
 ことは非常に大切なことだ
 と思います。このように四
 旬節を過ごそうとすれば、
 自分のうちにも、人の中にも、
 共同体の中にも、そして
 社会の中にも、静かに光る赤
 いランプのように「神は常に
 共におられる」ことに、もっ
 と気づくことができるよう
 になるのではないでしょ
 うか。

